

神戸女学院大学大学院文学研究科の四〇年

石 村 真 紀

二〇〇六年四月、神戸女学院大学大学院文学研究科は、設置四〇周年を迎えた。本学大学院は、現在は文学、人間科学、音楽の三研究科を有するが、文学研究科英文学、社会学の二専攻は一九六五年三月二十七日付けで設置が認可され、五月七日、最初の入学式を挙行した。^①

新制の神戸女学院大学は、一九四八年三月にいちはやく設置が認可されたが、時を同じくして新制大学となった他大学に順次大学院が設置されていたにもかかわらず、本学においてはしばらくの時が必要であった。一九六三年三月、本学初の公選制度によって選任された丹部トモ学長は、その就任の辞で、「絶えず日本の女子教育でパイオニア的役割を果たしてきた神戸女学院にも当然大学院があるべきだ^②」と、大学院設置の必要性を説いた。丹部学長のもと、新任教員二名の採用をもって大学院担当教員の充実を図り、一九六四年十一月、文学研究科英文学専攻ならびに社会学専攻修士課程設置申請を行った。申請時の学生定員は、各専攻それぞれ入学定員五名、収容定員一〇名である。

一九六五年当時、全国では国立四三、公立一七、私立七一の大学に大学院が設置されており、このうち女子大学は国立の二大学、私立の五大学（本学を含む）であった。^③二〇〇四年現在、大学院設置数は国立八七、公立六六、私立三

九二大学に及ぶ。^④

二専攻でスタートした文学研究科は、一九七六年に文学部社会科学科を改組し総合文化学科としたことを期に、一九八〇年、第三の専攻として日本文化学専攻を増設した。^⑤ 日本文化学専攻は、当初より「国際的、ないしは比較（文化）的視点に立つ具体的日本文化と、その構造の解明」及び「国内における外からの日本研究」を標榜しており、総合文化学科の多様なカリキュラムによる教育成果を継承、発展させるという目的に適うものであった。二〇〇〇年度には比較文化学専攻と名称変更し、その目的により近く、バラエティに富んだ科目を開講することとなった。

長らく修士課程のみであった文学研究科に博士後期課程が設置されたのは、一九八九年四月である。この年まず英文学専攻に、ついで二〇〇二年、比較文化学専攻にも博士後期課程がおかれた。その背景には一九八〇年代に入り、修士課程修了者の中から他大学院の博士後期課程に進学する者の割合が増加したこと、また修了者からの、引き続き研究を続けたいという声の高まりがあった。^⑦ 博士後期課程単位取得者の輩出から一〇年余りを経た二〇〇二年三月、初の博士号が授与され課程博士一名、論文博士二名が誕生した。

このように、大学卒業生のさらなる研究の場を提供してきた文学研究科に、二〇〇四年四月、専門性の高いユニークなコースがおかれることとなった。英文学専攻博士前期課程通訳・翻訳コースである。当初は通訳コースとして英文学専攻の定員増というかたちで設置されたが、通訳と一体をなす翻訳の科目を加えて通訳・翻訳コースとした。このコースは、主に通訳業務に携わる社会人が、専門分野に関する知識をより深め、質の高い通訳者を目指すための、専門職養成に近い目的を持ったものである。社会人を対象としているため、本学始まって以来の夜間・土曜日開講を行っている。

設置後四〇年を経て、文学研究科は学生数五〇名を越える大所帯となった。^⑧ 正規の学生に加え、聴講生、科目等履

修生も在籍し、^⑨学生の年齢層もさまざまである。今後、女子高等教育機関の先駆としてさらに成果をあげてゆくことが期待されている。

註

① 『神戸女学院百年史 総説』三四一頁には、「大学院の入学式は四十五年（一九七〇）五月七日に行われ、……」とあるが、これは誤りである。「神戸女学院学報」第二八号（一九六五年七月九日）に、「大学院始まる」と題して一九六五年五月七日に行われた大学院入学式における山口秀夫研究科委員長の式辞が掲載されている。

② 「神戸女学院学報」第二二号（一九六三年七月五日）

③ 文部省大学学術局大学課監修「昭和四十一年度 全国大学一覧」による。

④ 大学教育研究会監修「平成一六年度 全国大学一覧」による。

⑤ 昭和五十四年九月二十一日開催の第五回教授会議事録抄（七九席第一一号）によれば、当日、議事として「文学研究科に一専攻を増設する件」が上程された。同議事録抄には、「長い間、総合文化学科の延長線上に如何なる大学院を設けるか、あるいは他の学部、学科と関連せしめた大学院は如何にあるべきかを含めて論議してきたが、非常に焦点をしばって、「日本文化学専攻」を先ず発足せしめることとなった。」とある。

⑥ 「神戸女学院大学大学院文学研究科日本文化学専攻 増設協議書」（昭和五十四年十一月二十九日付）による。

⑦ 「神戸女学院大学大学院文学研究科英文学専攻 課程増設協議書」（昭和六十二年十一月三十日付）による。

⑧ 二〇〇六年五月一日現在、博士後期課程一〇名（英文学専攻五名、比較文化学専攻五名）、博士前期・修士課程四四名（英文学専攻二六名、社会学専攻四名、比較文化学専攻一四名）が在籍している。

⑨ 研究科において聴講生、科目等履修生の受入を行っているのは文学研究科のみである。二〇〇六年五月一日現在、聴講生二二名、科目等履修生三名。なお、二〇〇三年度より、男性の聴講を許可している。

表1 年度別修了者、博士後期課程満期退学者、博士号授与数

年度	英文学	社会学	日 本 文化学	比 較 文化学	英文学D	比較文 化学D	博士号 授与
1966		3					
1967	4	1					
1968	3	1					
1969	1	1					
1970	2	1					
1971	1	2					
1972	0	1					
1973	1	2					
1974	2	2					
1975	4	0					
1976	0	0					
1977	0	1					
1978	6	2					
1979	3	2					
1980	4	4					
1981	5	1	1				
1982	2	3	3				
1983	2	0	3				
1984	2	2	0				
1985	2	1	1				
1986	4	6	1				
1987	3	0	6				
1988	5	2	3				
1989	2	1	4				
1990	1	2	3				
1991	4	5	6		1		
1992	6	5	3		0		
1993	5	1	5		1		
1994	6	2	2		0		
1995	4	9	1		3		
1996	2	4	2		0		
1997	2	5	4		1		
1998	1	3	2		3		
1999	2	3	4		1		
2000	2	6	1		4		
2001	2	1	3	6	2		論 2 課 1
2002	6	2	1	5	1		
2003	5	6		3	1		
2004	4	2		5	2	1	課 1
2005	7	4		6	1	1	

・各年度、前期未修了者を含む

・Dは博士後期課程

・博士号授与の項、論は論文博士、課は課程博士

表3 日本文化学専攻授業科目表
(1999年度)

選択必修	日本文化論特殊講義 日本民俗学特殊講義 日本史特殊講義 日本史演習 日本語学特殊講義 日本近代文学特殊講義 日本古典文学特殊講義 日本近代文学演習 日本思想史特殊講義
選 択	文化基礎論特殊講義 国際文化論特殊講義 比較文化論特殊講義 比較文化史特殊講義 比較文学特殊講義 比較思想演習 比較宗教演習
必 修	キリスト教学

学修便覧/開講科目表 第49号(99教第1号)による

表4 比較文化学専攻授業科目表
(2000年度)

選択必修	日本文化論 日本語学特殊講義 日本文学特殊講義 日本文学演習 日本史特殊講義 日本史演習 比較宗教学 比較思想演習 比較文化・文学 比較社会史
選 択	国際文化論(Ⅰ) 国際文化論(Ⅱ) 文化基礎論(Ⅰ) 文化基礎論(Ⅱ) キリスト教学

学修便覧/開講科目表 第50号(2000教第1号)による

表2 歴代研究科委員長・研究科長

年度	名 前
1966	山口秀夫
1967	溝口靖夫
1968	溝口靖夫
1969	山口秀夫
1970	山口秀夫
1971	池川清
1972	池川清
1973	中村順一
1974	松村昌家
1975	渡辺久雄
1976	岡田藤太郎
1977	大井浩二
1978	大井浩二
1979	岡田藤太郎
1980	小関三平
1981	三木俊秋
1982	三木俊秋
1983	松村昌家
1984	松村昌家
1985	小関三平
1986	小関三平
1987	池井望
1988	大野篤一郎
1989	金城盛紀
1990	金城盛紀
1991	三上勝也
1992	三上勝也
1993	大野篤一郎
1994	大野篤一郎
1995	金城盛紀
1996	金城盛紀
1997	高島進子
1998	高島進子
1999	上野輝将
2000	上野輝将
2001	山田由美子
2002	山田由美子
2003	岩田泰夫
2004	岩田泰夫
2005	上紀子
2006	上紀子

・2002年度より、文学研究科長

・2005年度より、文学部部長が文学研究科長を兼任